



Title	＜紹介＞大槻修・片岡利博ほか校訂訳注『中世王朝物語全集 10 し の び ね ・ し ら 露』
Author(s)	加藤, 昌嘉
Citation	語文. 2000, 74, p. 48-49
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/68966">https://hdl.handle.net/11094/68966</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 紹介

大槻修・片岡利博ほか 校訂訳注

『中世王朝物語全集10 し の び ね ・ し ら 露 』

加藤 昌 嘉

▼毎回の刊行を心待ちにしている中世王朝物語全集から、『しのびね』『しら露』が出ました。前者は大槻修氏・田淵福子氏、後者は片岡利博氏によつて本文が立てられ、全訳と註、解題・年立・系図が附されています。

日本文学史から継子Ⅱ鬼子扱いにされて来たと思しい中世王朝物語が、近年このシリーズによつて汎くその光芒を放ち始めたのは嬉しい限りですが、就中『しのびね』『しら露』の本文と訳註が出来したのは、学会にとつても洵に意義深いことと云えます。

▼『しのびね』は、貴公子公経と落魄の姫君忍び音とが密やかに愛を育むものの、その間に帝や舅が容喙、最後には、姫君は后・女院にまで昇り、男君は出家してしまふ、という悲恋通世譚。夙くから『しのびね型』という術語があるように、この作品は『あきざり』『浅茅が露』『海人の刈藻』『石清水物語』『兵部卿物語』『むぐらの宿』など多くの中世王朝物語の基型と目されるものです。また、『風葉集』に載る和歌が『現存本しのびね』に存在しないことから、この作品は『古本しのびね』の改作によつて成つたと考えられ、その過程が様々に論じられても来しました。

これまで大槻氏は『蓬左文庫蔵しのびね物語』『校本しのびね物語』『王朝の姫君』『中世王朝物語の研究』（『しのびね物語の改作態度』等収載）を上梓しておりますが、本書にはそうした積年の研究成果

果を礎とする指摘が散見します。

註に於いて留目されるのは、底本（筑波大学付属図書館蔵本）とは別系統である書陵部本や蓬左文庫本の異文がしばしば引かれていることでしょう。『しのびね』の本文は『狭衣物語』『住吉物語』のように振幅烈しいものではないながらも、読む者はその微かな揺動から諸本それぞれの論理を汲み取つてゆくべきだと思います。

また、平安時代に見られぬ、中世作品独自の表現が挙げられていることも注目に値しましょう。これは前掲書所収の『中世王朝物語』の特異な表現・ことばから繋がるものですが、そこでは時に軍記物語やお伽草子との契合ぶりが指摘されていて、国語学的な考查の手薄な範囲だけに、今後のさらなる検覈が俟たれるところです。

また、かねてから議論のある「桐壺の女御」の位置づけ・矛盾点についても簡明な註が施されており、附録の系図もその見解の一つを撰取することによつて作られていると見られます。この問題については私も『詞林』25号の特集『しのびね物語』所載の蕪稿で僅かながら論じたことがあるのですが、今回、本書によつてお洩いをし、一筋縄では行かぬこの作品の有様を改めて感得したことです。

ともかくも、中世王朝物語の要と称すべき『しのびね』が、最も相応しい専門家を、装いも新たに巷間に現出したのは、慶ばしい限りと申せましょう。

▼『しら露』は、白露姫と契り交し合っていた男君が、この関係を近親相姦だったと誤解、ために疎遠になり、白露姫は悲歎して身を隠すが、男君は間違いに気づいてこれを搜索、二人は結ばれ幸せになる、というお話。解題の云うように、成立は南北朝頃と思しきものの、平安時代の和歌・物語の「優美な言葉づかいをふんだんに取

り入れ「全編が洗練された美しい文章で綴られている」佳作であり、滋味掬すべきテキストだと評価できます。

その『しら露』を再生せしめた片岡氏の全訳も達意にして流麗なもので、氏の講筵に列したことのある私などは特に、物語の細部細部が生きた現代語の力によって肺腑にストンと落ちる、そんな快感を久々に覚えた次第です。また、そこに附された註も、禁欲的ならいずれも剝切にして有益なもので、『古今集』『伊勢物語』『源氏物語』との繋がりが観取できるばかりでなく、底本文がどのように解説・校訂されているか、典拠たるべき和歌や物語がどのように同定されているかが窺い知れ、再読三読に値すると云えます。

底本は早稲田大学図書館蔵本。いわゆる天下の孤本で、しかもその紹介は一九六七年のことであり、研究の歴史も浅く、本文すべてに互る訳註が供されるのも今回が初めてのこととなります。向後、本書によって『しら露』愛読者・研究者が増えてゆくに相違ないと期待されます。

なお、片岡氏には『白露物語』の基礎的研究（『文林』31号）という刺激的な御論があることも申し副えておきます。本書と併せ読めば、『しら露』の本文・成立の問題のみならず、物語研究・本文批評のあり方を考えるに裨益するところ大でしょう。

▼因みに、この中世王朝物語全集シリーズでは、大槻氏・片岡氏の手にかかる『我が身にたどる姫君』も予告されております。性と愛欲を謳い、多彩異様な人間ドラマに充ち溢れるこの巨篇が、二世紀、どのような相貌で甦るのか、今から愉しみでなりません。

（笠間書院、一九九九年六月二五日発行、二七七頁、四四〇〇円）

—— 本学大学院研究生 ——